

「そなえるキャンプ」報告書

令和4年10月1日（土）～10月2日（日）

【目的・趣旨／概要】

防災・減災体験活動を通して、「自分の命は自分で守る」「お互いに助け合う」という自助・共助の意識を育む。

【連携先】

福島大学人間発達文化学類 初澤 敏生 教授

福島大学地域未来デザインセンター 天野 和彦 特任教授

【参加者】

対象：小学生4年～6年生とその家族

実績：8家族27名

【プログラム概要】

【集合・受付】【はじめの会】	1日目	12時00分～12時20分	
【昼食】	1日目	12時20分～13時00分	
【防災オリエンテーション】	1日目	13時00分～13時30分	
導入のプログラムとして、今回の事業でどんなことを学ぶかを説明した。場面設定やプログラムの流れを伝えたため、参加者は、防災・減災について興味・関心を高めることができた。			
【防災クッキング】	1日目	13時30分～15時00分	
被災時には食の確保が重要なため、ガスコンロの必要性や災害時の非常食について説明を行った。その後、非常食の調理を家族ごとに行い、試食をした。また、家族ごとに3日分のメニューを考えた。昨年行ったパッククッキングとは別に、ローリングストック法についても伝え、日常的な防災に取り組むことで自助の意識を高める機会となった。			
※「パッククッキング」とは、ポリ袋に食材等を入れ、袋のまま鍋で湯せんする調理方法。			
【避難誘導チャレンジ】	1日目	15時30分～17時30分	
高齢者体験セットと車いすを用いて、館内を家族グループで避難する体験を行った。災害弱者とともに避難所まで安全に避難するために留意することについて体験を通して学ぶことができ、共助の大切さについて確かめることができた。			
【夕食】	1日目	18時00分～19時00分	
【入浴】	1日目	19時00分～21時50分	
【朝のつどい】	2日目	7時00分～7時20分	ラジオ体操等
【朝食】	2日目	7時30分～8時30分	
【避難所運営ゲーム】	2日目	9時30分～12時00分	
天野特任教授の指導のもと、避難所運営について家族ごと、またはグループごとに考えた。これから起こると考えられている地震や実際の被害状況についての説明後、避難所で起こった実際の問題点について知り、どう解決していくかを話し合い、全体で共有した。			
【昼食】	2日目	12時00分～13時00分	
【みんなの命を守るアクションプラン】	2日目	13時00分～14時30分	
防災について自分事としてとらえてもらうために、参加者の住む市町村のハザードマップをもとに、自分の家が災害にあったときのことについて確認した。また、マイタイムラインを用いて、被災した際に具体的にどのような行動をとればいいのかについて学んだ。それらをもとに家族ごとにアクションプランを考え、全体に共有をした。			
【おわりの会】	2日目	14時30分～15時00分	
本事業を振り返る場として、おわりの会を行った。子どもたちがこの事業を通して学んだことを発表し、それぞれの家族において災害時の対応についての力をつける機会となった。			
【解散】	2日目	15時00分	

【成果】

- ・前年度に引き続き、講師である初澤敏生教授、天野和彦特任教授と連携し、事前の打ち合わせを行いながら、プログラム開発をし、事業運営をすることができた。
- ・家族を対象としたことで自分事として考えてもらう機会となった。ハザードマップやマイタイムラインは家族ごとの場面を想定することができ、具体的にアクションプランの考察につなげることができた。
- ・場面設定を明確にしたことで、自助⇒共助⇒具体化の流れで事業を組み立てることができた。また、アイスブレイクを行うことで前年度の課題であった参加者の硬さは解け、和やかな雰囲気での活動を進めることができた。全体的にゆとりをもって事業運営を進めることができた。

《参加者の声》

- ・家族でなかなか考えることがない内容なので、貴重な体験ができた。
- ・経験からの学びができ、とても満足のいく内容だった。
- ・また、こうした事業があれば確認の意味でも参加したい。
- ・災害弱者が身近にいるので対策をしたい。
- ・発想を変えて考えることも大事だと気づくことができた。

【課題と方策】

- ・2日目は座学が中心のプログラムで、飽きてしまった様子が見られた。また、対象年齢より小さい子も参加していたため、内容が難しかった場面があった。各日のプログラムの内容に体験を入れるなど、集中して取り組めるプログラム構成をする必要がある。
- ・プログラムが研修支援に援用できる内容としてはやや特殊であり、より多くの団体に普及啓発ができるプログラム開発が必要。
- ・実践研究事業として参加者の変容を測る方法を研究しており、追跡アンケートを予定しているが、より有効な尺度の開発については今後も引き続き関係機関と連携し検討していく。

国立那須甲子青少年自然の家 [作成] 企画指導専門職 大塚 渉

